

01

あの日から間もなく「川辺復興プロジェクトあるく発足」



たくさんの方が集まって、子どもたちの声が響いていた元気な川辺の景色を取り戻したい…。そんな思いを受けて「川辺地区まちづくり推進協議会」の榎原さんを中心に結成した「川辺復興プロジェクトあるく」は、多世代の担い手によって運営され、川辺小学校に設置されたプレハブは、地域のイベントや居場所づくり、情報発信等の拠点となりました。

02

あの日から1年半「川辺小学校復旧」



川辺小学校校舎が復旧し、園小学校に併設された仮校舎で過ごしてきた子どもたちが1年半ぶりに帰ってきました。多くの住民のかけ声と拍手に迎えられる子どもたちは元気いっぱいに登校。

新たなスタートとなった3学期の始業式では、スイートピーの花束が一人ひとりに贈られました。全員で校歌を斉唱し、体育館の2階に上がって、復興への願いを記した手づくりの紙飛行機を一齐に飛ばしました。

あの日から今まで、そしてこれから… 私たちのまちは一歩ずつ歩みを進めています。この章では、真備の地区ごとの復興にむけたこれまでの活動とこれからの思いを紹介します。

03 あの日から2年「防災おやこ手帳完成」



交流の場は少しずつ、まちづくりの場へ。
あるくがおこなった「パパ・ママアンケート」の結果から、災害で得た教訓をたくさんの子育て世代に伝え、命と暮らしを守るヒントにしてほしい！と防災ブックが完成しました。
川辺地区の被災者の体験談、分散避難を考えるためのマイ避難先や避難スイッチ、お役立ち防災グッズなど、気軽にわかりやすい内容で様々な機関と連携し作成しました。
真備町内の全保育園・幼稚園・小学校に配布し、必要な方にもお配りしています。

右側のプレハブ「あるく」、左側の「てくてく」で様々な交流活動を行っています。今後も手芸や勉強会、体操など継続して行っていく予定です。



04 地域でみつけた「これから」 ～みなし仮設のある地域で生まれた絆～

みなし仮設住宅のある地域での支え合いや地域のつながり。住んでいた地域は違いますが、支え合う気持ちに「地域の壁」は存在しませんでした。
「被災者を支えたい」という気持ちは、地域に新たな絆をつくり、その絆は被災者が前に進むための大きな力になっています。



▲生活の相談にのってくれた地域の自治会長楠本新太郎さん。



▲田村聡子さん(右)と母親の田村潤子さん(左)。



▲郵便の手続きの相談等で力になってくれた、下津井郵便局の山本郵便局長。

発災の日、川辺に住んでいた田村聡子さんは、救助隊により助け出され九死に一生を得ました。
その後は、児島(下津井)のみなし仮設住宅に入居しましたが、田村さんはみなし仮設住宅での生活を振り返り、「決して孤独ではなかった」と話します。
「真備に戻れば知り合いがたくさんいるし、児島には、発災直後から支えてくれた同級生や、みなし仮設住宅のある地域の自治会長、郵便局長や高齢者支援センターや社会福祉協議会など、困ったことがあれば何でも相談にのってくれる人がいたから」と、その理由を教えてくださいました。

地域のチカラを信じている。

No.2

おかだ

岡田

01

あの日から間もなく 「岡田分館の集い」

被災後、岡田地区の公民館「岡田分館」では、災害ボランティアセンターのサテライト拠点として多くのボランティア活動の現場調整を行ってきました。

そこに、地域の方が被災の状況に関係なく集い、ボランティアの道案内や詳しいニーズの把握など、よりきめ細かい支援が行われました。そして、ボランティア活動の合間には、自然と住民同士がそれぞれの心境を語り合ったり、これからの地域のことを話し合ったりする場が生まれました。



02

あの日から1年 「おしゃべりカフェ」



被災から数か月後には岡田分館の一次改修が完了して、またこの場所が集えるようになりました。

しかし、住民の生活も変わり、住宅の改修が進んでいる人や遅れている人、地区外での生活を余儀なくされている人など様々でした。

「生活がバラバラになってしまった今だからこそ、顔なじみが集い、お互いの近況を気軽に語り合える場が必要」との思いから、岡田地区では平成30年11月から「おしゃべりカフェ」を開催しました。季節に合わせてイベントや、支援団体の協力もありましたが、基本はみんなのおしゃべりが中心です。

遠方の避難先から参加する人もいて、多い時には130名もの人が集まり、開催時間いっぱい語り合いました。

以前から分館を積極的に活用していた岡田地区の住民だからできる、「気持ちの復興」に向かうための集いの場となりました。

03

あの日から1年半 「岡田を災害に強いまちに【その①にげる】」完成



岡田地区では発災から約2ヶ月後には、自分たちの地域がどのような災害にあったのかをまとめる作業に取り掛かりました。「発災時に」「この場所で」「どんなことが起こったのか」を災害を経験した住民として、正確な情報が集まる早い段階でまとめていくことが、必要だと考えたからです。

そのために、大学の先生のアドバイスを受けて情報をまとめ、幅広い年代の住民へのアンケートなども行い、一つひとつ被災の状況を整理してきました。

そして、みんなの情報や避難のタイミング、移動手段などをまとめた冊子「岡田を災害に強いまちに【その①にげる】」が令和2年2月に完成しました。この冊子は、逃げ遅れから二度とみんなが悲しい思いをしないために、岡田地区の全世帯に配布されました。

地域の記憶と経験がまとまったこの冊子は、岡田地区だけでなく、幅広い地区で防災を考える参考になっています。

04 地域でみつけた「これから」



▲岡田分館の窓に貼られた幼稚園児の夢や目標。子ども達の夢を応援する気持ちは、ずっと続いています。



▲発災後に分館前に灯された子どもたちが作った灯籠。



住民のこゑ

「今はコロナで大変な時期だけど、集まる方法を考えたり、情報を共有することは大事」

「みんなやりたいことはたくさんある。一部の人に負担がかからない仕組みも考えないと」

「今は世代間の交流は難しいけど、子どもとも一緒に何かしたい」

「地域や歴史のことを子どもたちに知ってもらうには、一時的な体験だけでなく、継続的で意味があるものにしていきたいな」

「みんな」でひとつになる。

No.3

その
菌

01

あの日までもあの日からずっと 「地域の集いの場」



▲「子ども達が笑えない日々が気になっていたの」と上有井公民館でサロン活動をしていた代表者は語ります。被災後は地域住民と支援団体と一緒に子どもを中心とした集いの場を何度も開催しました。

高台にあった上有井公民館は上有井の被災者の避難所として長く利用されました。もともと地域の交流の場所であったところが、被災後はさらに年代を問わず集える場所になっていきます。それはコロナ禍の今でも続いています。



02

あの日から半年 「みんなに申し訳なくて 集ったり 笑ったりしては いけない気がしていた」



砂走さくらいきいきサロン



サロンさかの

その他のサロン活動も、災害を通じた経験や思いから「自分たちが今できることはなんだろう」と話し合い「交流の場をとおして、みんなで一緒に復興に向けてがんばっていきこう」という意識を共有しました。

「被災した皆に申し訳なくて、声をかけることができない」「笑ったりしてはいけない気がした」こんな声も聞かれましたが、「自分たちが元気でないと支え合えない！」「と思いつき、活動が再開されました。

菌地区には被災した地区と被災していない地区があります。「こんな時に集っている場合ではない」としづらく集うことを自粛していたサロンもあり、被災していない方の葛藤も、一言では表せないものがありました。

「みんな」が元気になるために

03

あの日から時間がたった今だから 世代を超えて語り合えること「菌っ子だっぴ」



菌小学校が元の学校生活に戻っていくなかで、「災害が起きたあの日のことを振り返らずに、このまま記憶から消してしまってもいいのか」という思いがあったと、高津校長は話します。

そんな時、以前からつながりのあった「NPO法人だっぴ」の柏原さんに相談し、6年生の総合学習で「菌っ子だっぴ」に取り組みました。菌地区の大人と児童と大学生（高校生）が同じテーマでフリックトークを行います。「好きな給食は？」「心ってどんな形？」「どんな人になりたい？」そして「あの災害の時のことを今どう思う？」



お互いの体験と思いを伝え合い、共感し新たな気づきを持ち、そして笑顔になりました。

地域の一員として尊重し合える関係づくりにつながっています。



04

地域でみつけた「これから」

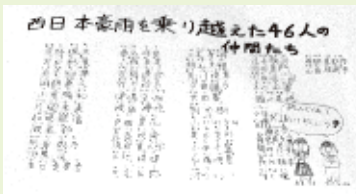


▲「マニュアルを作成することで、役員が変わった後も後任が困らないようにしたい」と、発災時に避難した坂の上の神社を眺める三海自治会長。

有井の小山地区では、令和元年の夏頃から独自の避難マニュアルを作成しました。

ただ「声をかけよう」というだけでは実際の避難は難しいとの思いから、地区を4班に分け、避難後はリーダーに連絡を入れる体制など、具体的な内容を決めました。

現在は地域の拠点だった小山公会堂を改修する話を進めています。まだ地区に戻れない人とのつながりを保ちながら、みんなが待っている地元行事の再開を目指しています。



災害から2年半が過ぎ、菌小学校では災害発生の「そのとき」の思いや「それから」の日々の記録を残しておくことはとても大切であると考え、防災教育副読本「西日本豪雨災害の教訓を未来へ」と令和元年度卒業生がまとめた「無限大（西日本豪雨46人の語り部）」を発行しました。

中学生も活躍中



真備東中学校1年生の総合学習の取り組みの中で、「私たちが今真備でできること」を考えているチームがあります。自分たちも地域みんなも笑顔になれるそんな活動のきっかけになるよう…

01

あの日から間もなく 「開かれた居場所二万仮設団地談話室」



二万仮設団地では、談話室をいつもオープンにしておくことを住民みんなで決めました。多くの支援者、まちづくり推進協議会や地区社会福祉協議会などの地域の団体、ママ友、住民さんどうしのおしゃべり会・・・たくさんのつながりが生まれ、誰でも気軽に集え憩える場所になりました。

つながった絆は、それぞれ行き先が分かれても途切れることはありません。

02

あの日から1年半 「被災していないからこそ 矢形東谷地区の取り組み」



矢形東谷地区の集会所は発災時にあわや床上というところまでの浸水でした。この地区は4町内で組織されています。低いところ高いところが混在し、土砂崩れの危険地区もあれば、盤石な高台もあり、共通した危機意識が持ちづらい地域でした。

半面、ほとんどの住民は顔見知りで、向こう三軒両隣の関係が根づいているところでもあります。

この西日本豪雨災害で危機意識を持った地区の有志とそれぞれの地区の行政連絡員や総代が集まり、地域



矢形東谷サロン
この地区ではサロン活動も活発。30人以上が集い盛り上がります。

の実情について全世帯へアンケート調査を行い、その結果に基づいて「今自分たちの地域ではどういったことが必要なのか」さらに話し合いを重ね、指定避難所以外の避難場所を決めたり、端町内では避難の際の声掛け連絡網をつくり、いざというときに備えることになりました。



03

あの日から1年半
「二万仮設団地での関わりから地域での住民交流会へ」



「二万に住んでいるのだから、仮設住宅の住民も地域の一員がモットーの二万地区では、毎月最終土曜日に二万分館で行われている「親睦の会『和』」という通いの場にも被災者をお誘いしています。



1年半が過ぎても、つながった絆は健在です。この日はおかやまコープ・チーム夏色・倉敷医療生活協同組合・二万地区社会福祉協議会と建設型仮設の住民、二万地区住民もみんな一緒にフェスティバルを開催し、大勢が二万分館へ足を運び、交流を楽しみました。

『親睦の会「和」』

- 開催日時：毎月最終土曜日 13:30～16:30
- 飲み物代 100円
- カラオケ・茶話会など。出入り自由

04 地域でみつけた「これから」

住民のこえ

自分たちの地区はほとんどが顔見知りで日ごろからのつながりはある方だと思う。それでもいざとなったら慌てて、普段は出来ることもできないかもしれない。命を守るためにはまず個人個人が逃げることが大切だけれど、その時に慌てないよう、この地区の誰も逃げ遅れることがないよう、非常時の仕組みづくりが必要だと思う。

(60代女性)

暮らしの中で「助けて～」「よきた！任せとけ！」が言い合える地区になってほしい。

(70代女性)



地域の「ほっと(癒・和・熱)」する場所。

No.5

や た
箭田

01 あの日から間もなく 「地域みんなの顔と心が集うたくさんの場所」



ごじとまさんのキッチンカー前で青空サロン



ブラザ坪田 駐車場でソーメン流し



平成30年11月 久しぶりの「タケノコ百歳体操の会」は外で!
(箭田分館前)



5m以上浸かった商店で物資配布とおしゃべり拠点

被災前から真備地区内の医療・福祉・介護の事業所、行政・当事者・ボランティア等で構成している緩やかつながりの会(真備連絡会)と地元有志が一緒に行っていた「地ビールと音楽の夕べ」。

それが、震災直後8月から箭田分館前の駐車場ですらに多くの住民と一緒に、毎月開催し、地元を懐かしむ大勢の集いの場になりました。その年の12月からは「まちコン」と名称新たに、老若男女みんなの集いの場として開催されています。

他にも公園やお店、住民宅等、色々な場所で大小様々な集いが行われ笑顔があふれました。

02 あの日からずっと 必要なのは何より人とつながる場「介護予防教室&ほっとサロン」

「誰かに会いたい人、ほっとしたい人は誰でもどうぞ」地域を問わず、被災の有無を問わず、多くの人が集っています。

あの日から3か月で始まったこのサロンは、多くの人の笑顔と関係をつなぎながら、2年半経った今でもそしてこれからも継続していきます。

箭田地区社会福祉協議会推進員のメンバーは「今、地域住民のためにできること、必要なことは何だろうか?」と度々作戦会議を行い、人と人が顔を合わせ話をする場の必要性を痛感し、高齢者支援センターと協働でこのサロンを始めました。



『介護予防教室&ほっとサロン』

- 開催日時：毎月1回 第4月曜日
10:00~12:00
- 開催場所：ライフタウンまび
⇒現在は真備保健福祉会館3階
- 参加費：無料「ごじとま」のコーヒー付き



03 あの日から約2年「地域連携型合同防災訓練」



▲防災メール及び箭田防災ライングループの登録ブースの様子。操作が苦手な方もこのブースで登録できます。



▲想定以上に大勢の参加があり、防災意識の高さがうかがえました。

平成30年7月豪雨で最も深く長い時間浸水していた地区の一つである箭田地区。住民の被災当時の振り返りでは、「避難をするタイミングを逸してしまった」「放送が聞えなかった」という声が多くありました。そのため、令和2年11月23日に行われた避難訓練では、「逃げる」という避難の目安をいかに全戸に知らせることができるか、ということを目標に行われました。

避難訓練では、地区内の福祉施設と連携し、支援が必要な方々の避難のサポートの演習も行われ、地域と施設・事業所との役割分担も確認できました。箭田地区では「箭田防災ライングループ」があり、この避難訓練でもどいういった規模の災害が起こっているか、避難訓練に合わせてリアルに情報を発信していました。このような工夫を行いながら、少しずつでも確実に「逃げ遅れゼロ」への道を歩んでいます。



▲受付を手伝うのは地域の中学生。地域の一員として役割をもって参加。



▲真備連絡会と合同で要支援者の避難を想定した避難訓練。建設型仮設団地の集会所とまきび荘へ。(写真上は真備総合公園建設型仮設団地の集会所)

04 地域でみつけた「これから」

住民のこゑ

被災して思ったのは『人とつながっていくことの大切さ』です。

今まで関りのなかった方や知り合いでさえなかった方々が力を貸してくれ、一緒にこれからを歩もうとしてくれる心強さや嬉しさ…。「ありがたいな、大切だな」としみじみ思います。

また、これからの地域でのつながりが「〇〇しなければならぬ」という義務的なものではなく、普段の何気ない暮らしのなかで、挨拶をしたり、一緒に笑ったりできる、ふんわりと温くなるようなものとなるよう、向こう三軒両隣のつながりづくりをしていきたいと思っています。

(片岡さん)

子どもから大人まで、障がいのあるなしに関わらず、みんなが生き生きと暮らせる住みよいまちになったらいいと思う。

様々な理由で人と関わるのがしんどくなってしまった人達や引きこもりの人達へも防災などの情報を届けられたらと思う。

また、そういった方々へのアプローチをそれぞれの地域で頑張られている社会福祉協議会や民生委員などの方が関わり方などで困っていたら、ピア活動の一環としても手伝えることがあるのではないかと思います。



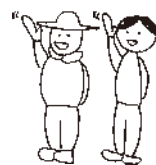
どんな障がいを持っていても、それぞれの関わり方で、地域の一員として役割を担うことができることをもって知ってもらいたい。

(矢吹さん)

01 あの日から間もなく「笑顔と気持ちがあつがる訪問型サロン」



発災以降「情報が入ってこない」、「物資が不足している」「ご近所さんと話せる場がない」などの住民さんの声に対応するため、住民、ボランティアの協力で行った訪問型サロンが行われました。「どこでもできるよ」とあちこちで場を提供の声がかかり、笑顔の輪が広がりました。



02 あの日から1年「呉妹を元気にする会・地域の施設との連携～分館での活動へ」



「呉妹を元気にする会」は、オール呉妹(子どもも大人も、被災の有無にかかわらず)の笑顔のために、呉妹地区で若手を中心に通いの場をつくり活動しています。呉妹分館修復中は、地域の介護事業所が場所を提供し、だれでも参加できる交流スペースとなりました。



10時頃から昼食を挟み13時頃まで開いていて、自分の好きな時間でいつ来てもいつ帰っても構わないスタイルです。参加者の要望でスマートフォン教室やたこ焼きパーティをしたことも。分館修復後は、呉妹分館に場所を移し、第4火曜日に開催中です。



「居場所」で地域を語り合う。

03

あの日から1年3ヶ月 自分たちのこれからを語り続ける「防災ばぁ」



この会と呉妹地区まちづくり推進協議会の防災班がこれからは語り続けることで熱意は呉妹地区全体に広がり、要配慮者マイ・タイムラインの作成も進んでいます。



▲「要配慮者マイ・タイムライン」本人とご近所さん、家族、関係団体 皆と一緒に作成

「被災してから今まで本当にがむしゃらに進んできました。地域の人たちとのつながりもでき、日々過ごすなかでこぼれる言葉からふと防災という目的をもって集い、自分たちのこれからをどうしたらいいかを語り続ける集いがあったもいのではないかと思います。」
『防災ばぁ』のきっかけを片岡奈津子さんはこう語ります。発災から1年3カ月で始まったこの会は毎月1回午後6時から8時頃まで語り合っています。



▲第1回防災ばぁ
そーる訪問看護ステーション
トレーラーハウス内にて



◀参加費は1ドリンク
300円

04

地域でみつけた 「これから」

住民のこゑ



▲要配慮者マイ・タイムライン作成会議を重ねる真備地区民生委員児童委員協議会 呉妹・服部支部の委員。

要配慮者マイ・タイムライン作成を進め、一人の逃げ遅れもない地区にしていきたい。
(40代女性)

非常時に動けるように日ごろのつながりを大切にできるまちにしていきたい。
(40代女性)

支え合える地域になるといいなと思う。
(70代男性)

思いやりのある地域を目指したい。
(60代女性)

若者がリーダーシップをとれるまちになってほしい。
(70代男性)

二度と分断されないために。

No.7

はっとり

服部

01

あの日から間もなく 「地域の絆を取り戻した 服部地区集いの会」



自宅の復旧が進むなか、9月中旬に被災した人から聞こえてきたのは、「皆でもう一度集まりたい」という声でした。しかし服部地区では、以前まで地域の集まりの場であった真備公民館服部分館が全壊し、すぐには復旧も困難な状況でした。そんななか、服部地区に住む瀬崎宏子さんは、自宅が全壊しているにも関わらず「地域のためになるのであれば」と、ご主人が経営されていた板金塗装工場跡地を提供され、9月下旬に「第1回服部地区集いの会」を開催しました。

再会された方々のなかには、「あなたが帰って来るならわたしも帰ってくるよ」と抱き合う方もおられ、つながりを再構築するきっかけづくりの場となりました。

◀第1回目の服部地区集いの会

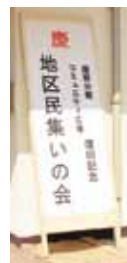


▶ 集いの場を盛り立ててくれた瀬崎 宏子さん

02

あの日から迎えた初めての春 「服部分館とコミュニティ広場の復活」

豪雨は住民の生活だけでなく、昔から続けていた地域行事も奪っていききました。しかし、平成31年4月、服部分館とコミュニティ広場の復活。地域の拠点が戻ったことで、発災前の服部の風景をほんの少し取り戻すことができました。



▲昔から服部で行われる「ふれあいの夕べ」住民皆の思いを込めて「はっとりがんばろう」とロウソクを並べました。

03

あの日から2年

『逃げる場所がないからこそ作りたい!』

そんな思いから設置された4つの届出避難所



▲▲
平成30年7月豪雨により被災した服部地区

多くの地域行事が復活するなかで、「逃げる場所がない」という課題は服部地区に残りました。そんななか、「久能周辺自主防災会」は「服部は平成30年7月豪雨のおり、水も引かず、発災から2日後になってやっと救助が来た地区。災害はいつ発生するか分からない。地域の高齢者等が早く、安全に避難するためにも、近い場所に避難所をつくりたい」と、3か所の届出避難所の設置に尽力しました。

また、先の水害での孤立を契機に、服部と箭田という2つの地区を跨いで結成された「遠田地区自主防災会」でも新たに届出避難所が設置されました。

逃げる場所がなかった服部に設置された4か所の届出避難所は、神社やお寺や個人宅など、地域と馴染みの深い場所が選ばれており、地域のつながりがあったからこそ実現したこの取り組みは、これからも地域を守り続けます。

04

地域でみつけた「これから」



◀久能周辺自主防災会 届出避難所
「八幡神社」



▲遠田地区自主防災会
届出避難所
「妙見山 本住寺」



▲久能周辺自主防災会 届出避難所
「久能周辺自主防災会 会長宅」



◀久能周辺自主防災会 届出避難所
「鶏足山 極楽寺」